三宝絵における希望表現について（続）

柴田昭二
連仲友

目次

一、はじめに
二、希望表現の構成形式
三、各形式の用法
四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿[1]を受け、三宝絵（三宝絵詞とも）関戸家本・東大寺切（以下、関戸家本と略す）を研究資料として、それにおける希望表現[2]の実態を解明しようとするものである。

三宝絵は、永観二年（九八四）に、源為憲が冷泉天皇の命を受けて、第二皇女尊子内親王の仏道知識を修学するために作成したものである。全三巻の内容は、上巻は仏の本生譚、中巻は高僧伝・霊験譚、下巻は各所の法会・法要の由来と模様を記す。その伝本には、関戸家本・前田家本・観智院本があり、それぞれ保安元年（一一二〇）、寛喜二年（一二三〇）、文永一〇年（一二七三）の書写識語が明記されて、関戸家本は最も古い写本である。前田家本と観智院本とはほぼ完本であるが、関戸家本は分断され、現存する本文は全体の三分の一程度のものである。ここで、現存する本文として関戸家旧蔵、現名古屋市博物館の墨付八三葉、東大寺蔵その他諸家に分蔵された八六葉、その後新出した五葉をまとめ一七四葉を一括して関戸家本と称する。

各本の表記及び文体については、関戸家本は草仮名・平仮名表記で和文、前田家本は漢字専用表記で和化漢文の文、観智院本は漢字片仮名交じり表記で漢文訓読調の文であり三様に異なる。三伝本の成立事情についてすでに先学に多く論じられているが、関戸家本は良質の料紙が用いられ、内親王に献上したものの俤を伝えると思われる。

既に「研究報告　第Ⅰ部第113号（二〇〇一・七）」において、前田家本と観智院本における希望表現について報告した。本稿はその考察を補い、関戸家本における希望表現の構成形式及び各形式の用いられ方を考察しながら、前田家本及び観智院本における希望表現との異同も比較し、希望表現の観点から三伝本の成立事情及び相互の影響関係について追求する。

テキストには、『諸本対照三寶繪集成』（小泉弘・高橋伸幸著　笠間書院　昭和五十五年六月刊）を用いる。

二、希望表現の構成形式

まず、関戸家本に見られた希望表現の構成形式の種類とおおよその用例数を見る。

欲	一例
～むとおもふ	一四例
～むとす	一三例
願	一五例
ねむ	一例
ねかはくは～	九例
ねかふ	五例
たまへ	三例
いのる	九例
こふ	一四例
もとむ	一七例

これらの構成形式の種類について、名詞形式の「欲」「願」、慣用形式の「～むとおもふ」「ねかはくは～」、動詞形式の「ねかふ」「いのる」「こふ」「もとむ」が見られる。一方で、平仮名表記和文体の文章であるにもかかわらず「まほし」「ばや」といった和文に多用される様式が見られない。

三、各形式の用法

1、「欲」「～むとおもふ」「～むとす」の用法

まず、「欲」の用法を見る。関戸家本に「欲」は一例見られる。比較のため、観智院本（以下「観」と略す）と前田家本（以下「前」と略す）の該当箇所の用例も並べておく。

(1)よくてん（んは加筆）のたのしひさかりなるもほむてのカ（カは加筆）たちきよきもこれらのむくいうることはみなそうにゆあむすによりてなり（二三七頁　下巻・4　溫室功德）

六欲天ノタノシヒサカリナルモ梵天ノ行キヨキモコレラノムクヒヲウル事ハ皆僧ニ湯ヲアムシ、ニヨリテ也（観）

欲天樂盛梵天行清得此等報皆依湯浴僧也（前）

例（1）における「よくてん」は仏教用語「欲天」であり、熟語の名詞用法である。それに対して、前田家本には「欲天」、観智院本には「六欲天」となっている。

次に、「～むとおもふ」の用法を見る。関戸家本に「～むとおもふ」は一四例見られる。

(2)ようめい天王くらゐにつきたまひぬ二年ありてのたまふ我三法に歸えしなんと思そ（一〇七頁　中巻・一　聖德太子）

用明天皇位ニツキ給ヌ二年アリテ仏法イヨ〳〵ヒロマリオコリキ王ノ仰ニ云イマハヒトヘニ三寶ニ歸依セムトヲモフ（観）

用明天皇即位二年有曰吾欲歸依三寶（前）

(3)こさうかたらひていはく我ゑうかうにかはりてそのはハ（ハは加筆）をやしなひつその心さしいまたひさしからさるにそのいのちすてにたえにたりなけきてもかひなしいまはのちのよをみちひかんとおも

ふにたふのうちにいます佛のみまへに
（二〇五頁　中巻・十八　大安寺榮好）

勤操カタラヒテ云ワレ榮好ニカハリテ其母ヲヤシナヒツ其志イマタ久カラサルニソノ命已ニタヘニタリナケキテモカヒナシ今ハ後世ヲミチヒカムト思ニ堂乃ウチニ佛イマス（観）

勤操語云我代榮好養其母其志未久其念已終歎而无益今欲導後世（前）

例（2）は、「私は三宝に帰依したい。」の意、例（3）は、「今は後世を導きたい」の意と解され、いずれも第一人称の自分自身に向けられる「願望」[3]を直接「表出」[4]する用例である。また、関戸家本の「～んとおもふ」に観智院本には「～ムトオモフ」、前田家本には助動詞の「欲」で表現し、三本の希望表現には「～んとおもふ」「～ムトオモフ」「欲」という対応関係が見られる。前田家本における「欲」は訓が決めかねるが、漢文の語法及び関戸家本、観智院本の読み方を見ると、意味的には同一の希望表現の用法であることに違いはない。

（4）山にすむへきところをとひみちをならはむとおもふこゝろさしをかたらふ（六三頁　上巻・一二　須太拏太子）

山ニ可住キ所ヲ問ト道ヲ習ハム思フ志ヲ語フ（観）

問テ可住山之所語欲習道之志サス（前）

例（4）は、「仏教の道を習いたいと思う」の意と解され、連体修飾節で「願望」を「説明」[5]する用法である。また、観智院本は漢文表記であるが「習ハムト思フ」と訓読することができ、前田家本は「欲」で、希望表現を表す部分は例（2）（3）と同様の対応関係になっている。

（5）まことそらことしらんとおもハ、のりとかんたうのうちに我ためにさをしけ我まさにのほりゐんといふ
（一七一頁　中巻・十一　高橋連東人）

實否ヲシラムト思ハ、説法ノ堂ノ内ニ我タメニ座ヲシケ我マサニノホリヰムトイフ（観）

欲知真者説法堂内爲吾敷座吾將上居云（前）

（6）人天の中にいのちのたのしひをえむとおもはゝいまゝさにかゆをもちてもろ〳〵のそうにほとこすへしといへれはなり
（二二七頁　下巻　1　修正月）

人天ノナカキ命ノ樂ヒヲエムト思ハ、イマ、サニカユヲモチテ諸ノ僧ニホトコスヘシトイヘレハナリ（観）

人天中欲得命樂今時以粥可施諸僧云也（前）

例（5）は、「真実を知りたいと思うなら」の意、例（6）は、「命の楽しみを得たいと思うなら」の意と解され、いずれも仮定の形で「願望」を「説明」する用例である。また、観智院本は「～ムト思ハ、」、前田家本は「欲」で、同一の対応関係になっている。

（7）乞者ミそかにけのかれなんとおもひたるに願主かねてうたかひて人をそへてまもらす（一七一頁　中巻・十一　高橋連東人）

乞食ヒソカニニケムト思ヰタリ願主カ子テウタカヒテ人ヲツケテマモラシム（観）

乞者密欲逃願主置疑令人守之（前）

（8）むこひそかにたよりをハかりてしうとをころしてむと思てかたらひていはく（一八九頁　中巻・十五　諾樂京僧）

　聟ヒソカニタヨリヲハカリテ舅ヲコロシテムト思テカタラヒテ云（観）
　聟竊求便欲殺此僧語云（前）

例（7）は、「乞者はひそかに逃げたいと思ったが」の意、例（8）は、「婿は舅を殺そうと思って」の意と解され、いずれも三人称の「願望」を「説明」する用法である。また、観智院本には「～ムト思」、前田家本には「欲」で対応する。

（9）のりなきところに一乗の教をときつ五濁のあしきよにひさしくはあそはんとおもはすとのたまふ（一一五頁　中巻・一　聖德太子）

　法モナキ所ニ一乗ノ義ヲ弘メ説ツ五濁悪世ニ久クアラムト思スト乃給（観）
　无法文之處説一乗之教不欲久在五濁悪世（前）

（10）ほとけこたへたまふわれもかのひとのおむあるをしらぬにはあらねとも女人をゆるして仏法にいれしとおもふなり（一五三頁　下巻・7　西院阿難悔過）

　佛申答給フ此人ノタメニ恩アルヲシラヌニハアラ子トモ女人ヲユルシテ仏家ニイレシト思ナリ（観）
　佛答吾非不知彼人爲吾有恩只免女人不入佛法思也（前）

例（9）は、「五濁の悪世に長く生きたくはない。」の意、例（10）は「女人の出家を許さないと思う」の意と解され、いずれも希望表現の否定形式であり、「願望」を「説明」する用法である。また、観智院本には「～ムト思ハズ」「～ジト思フ」で、前田家本には「不欲」「不思」で対応する。

次に、「～むとす」の用法を見る。関戸家本に希望表現と関連する「～むとす」は一三例見られる。

（11）なむちか山にいりて道をおこなふするをきゝてことさらにきたりてくやうせんとするなり（七七頁　上巻・十三　施无）

　汝カ山ニ入テ道ヲ行ナルヲ聞テ故ラニ来供養トセムト爲ル也ト（観）
　汝入山行道聞故来將供養也（前）

（12）中臣の勝海の連（ムラシ）またつはものをおこしてもりやの大連をあひたすけむとす（一〇七頁　中巻・一　聖德太子）

　中臣ノ勝海ノ連武者ヲヽコシ天守屋ノ大連ヲアヒタスケムトス（観）
　中臣勝海連亦發兵□（欠字）屋大臣（前）

（13）えのうはそくはかりことをなしてくにをかたふけむとすといふ（一三三頁　中巻・二　役行者）

　役優婆塞ハカリコトヲナシテ國王ヲカタフケタテマツラムトスト（観）
　役優婆塞成謀欲傾国（前）

例（11）は、「供養しようとする。」の意、例（12）は、「守屋の大連を助

けようとする。」の意、例(13)は、「国を傾けようとする。」の意と解され、いずれもいわゆる有情物の「将然」を表す。この有情物の「将然」は希望表現と関連性がある用法である。また、例(11)の観智院本の用例には宣命書の「養ヒム爲ル」とあって、前田家本の用例には「將」で対応している。例(12)の前田家本には希望表現が見られないが、これは恐らく四字分ほどの欠字の部分にあたる。例(13)には「〜むとす」「〜ムトス」「欲」で対応関係をなしている。

2、「願」「ねむ」「ねかはくは〜」「ねかふ」「〜たまへ」の用法

まず、「願」の用法を見る。関戸家本に「願」が一五例見られる。その使い方に名詞用法とサ変動詞の用法とが見られる。

(14)我よをすくふ願あり(一〇三頁　中巻・一　聖徳太子)

我ヨヲスクフ願アリ(観)

我已有願(前)

(15)ほこのさきにさゝけて願をおこしてのたまはく

(一〇九頁　中巻・一　聖徳太子)

鉾ノサキニサゝケテ願テ云(観)

上擎杵鉾發願云(前)

(16)わらはかゝることゝすして心にうち(ちの次にニを補入)ねむをおこす(一九三頁　中巻・十六　吉野山寺僧)

童乃カルゝコトエスシテ心中ニ發願ス(観)

童不得遁心中發願(前)

例(14)は、「世を救う願がある」の意、例(15)は「願を立てて」の意、例(16)は「ねん(念か)をおこす」とあるが意味は例(15)と同様である。これらの例はいずれも仏教用語の神仏にかける「願」であり、名詞用法である。ただし、例(15)の観智院本には「願テ」とあって動詞用法になっている。例(16)の観智院本と前田家本にはいずれも「発願」となっていて、関戸家本の「ねん(念)」と用法の差が認められる。

(17)大臣もかくのことく願していくさをすゝめてたたかふに

(一〇九頁　中巻・一　聖徳太子)

蘇我大臣又カク乃コトク願シテ軍ヲアツメテス、ミタ、カフニ(観)

大臣亦如此願進軍戰(前)

(18)をんなかにをもちてらにかへりて行基菩薩して咒願せしめてたに河にはなつ(一八一頁　中巻・十三　置染臣鯛姫)

女蟹ヲモチテ寺ニ歸テ行基ササ(菩薩)シテ咒願セシメテ谷河ニハナツ(観)

女持蟹歸寺令行基ササ(菩薩)咒願放谷川(前)

例(17)における「願して」はサ変動詞の形で実動詞用法である。観智院本の用例にも「願シテ」とあって対応関係にあるが、前田家本の用例には「如此願」とあって、「願」は名詞用法である。例(18)における「咒願せ」もサ変動詞の形で実動詞用法であり、観智院本と前田家本は同様である。

(19)願主なほゆるさす(一七一頁　中巻・十一　高橋連東人)

願主ナヲユルサス（観）
願主更不免（前）

(20)願すおほきになきていはく（一七三頁　中巻・十一　高橋連東人）
願主大ニナキテ云ク（観）
願主大驚云（前）

例(19)における「願主」と例(20)における「願す」（「す」は「主」の直音仮名表記）はいずれも仏教用語であり、熟語の形の名詞用法である。観智院本と前田家本も同様である。

次に、「ねかはくは～」の用法を見る。関戸家本に「ねかはくは～」は九例見られる。

(21)ねかはくはしはラク御はらにやとらん
（一〇三頁　中巻・一　聖徳太子）
願ハ暫ク御腹ニヤトラム（観）
願宿御腹（前）

(22)そうし申す臣らかやまひのくるしくいたきことたへかたしねかはくは三宝にいのらんと（一〇七頁　中巻・一　聖徳太子）
王ニ奏申テ云臣等カ病クルシクイタキコト更ニタヘカタシ願ハ三寶ニイ乃ラムト（観）
奏言臣等之病苦痛叵耐願祈三寶（前）

例(21)は、「しばらくお腹にとどまりたい。」の意、例(22)は、「三宝に祈りたい。」の意と解され、いずれも「ねかはくは～ん」の形で、話者の「願望」を直接「表出」する用法である。

(23)たゝしねかはくは大徳のちのよをみちひかむとおもへといふ
（一五三頁　中巻・五　衣縫伴造義通）
タ、願ハ大徳後世ヲ引導シ給ヘト云（観）
唯願大德後代導思云（前）

(24)ねかはくはつみをゆるしたまへ
（一九五頁　中巻・十六　吉野山寺僧）
願ハツミヲユルシ給ヘ（観）
免此罪給（前）

(25)をむなちかひていはくもし我のちのよにほとけとなるへくはねかはくはこのあふらつきすして。ひかりきえされといふ
（二八一頁　下巻・15　薬師寺万燈會）
女誓テ云我後ノ世ニ佛トナルヘクハ此油ツキスシテヨモスカラ光キヘサレトイフ（観）
女誓言若我後世可成佛者此油不盡終夜不滅云（前）

例(23)は、「ただ大徳に後世をお導きいただきたい。」の意と解され、「ねかはくは～命令形」の形で、話者の他者への「希求[6]」を「表出」する用法であり、観智院本と前田家本も同じ構文である。例(24)は、「罪をお許しください。」の意と解され、これも「希求」を「表出」する用法であ

るが、前田家本の用例には「ねかはくは」に該当する表現がなく、和化漢文に見られる敬語「給」（命令形「タマヘ」と訓読するか）で表現している。例（25）は、「この油が尽きず光が消えないように。」の意と解され、これも「希求」を「表出」する用法であるが、観智院本及び前田家本には「ねかはくは」に直接対応する表現が見られない。

次に、「ねかふ」の用法を見る。関戸家本に「ねかふ」は五例見られる。

(26)鬼のいはく、われはうしのし、をねかひくふ
（一八五頁　中巻・十四　楢槃嶋）

鬼ノ云我ハ牛ノ肉ヲ子カヒクフ（観）
鬼云吾願食牛肉（前）

(27)たゝしむこの姓名をは人にかたらすもとのさとにかへらんことをねかふ（一九一頁　中巻・十五　諸樂京僧）

但聟ノ姓名ハ人ニカタラスモトノサトニカヘラム事ヲ子カフ（観）
但聟姓名語人樂歸故郷（前）

(28)ねかふところはたゝこのしまをゆるされておほやのにはにしてつミ（次は欠字）（一三三頁　中巻・二　役行者）

子カフ心ハタゝコノ嶋ヲマヌカレテオホヤケノニハニシテ罪ヲウケフサムトイノル（観）
所願被許此嶋出公庭伏罪祈（前）

例（26）は、「私は牛の肉をもとめて」の意、例（27）は、「古郷に帰ることを願う。」の意、例（28）は、「願うのはただこの島を離れて」の意と解され、これらの「ねかふ」はいずれも実動詞用法である。また、例（27）の前田家本の用例は「楽フ」と訓読できよう。

次に、「たまへ」の用法を見る。関戸家本に「ねかはくは～」と呼応せずに単独で用いられる「たまへ」は三例見られる。

(29)心をいたして願をおこしてあまたのそうをさうして三七日をかきりてこのきとふらひえさせたまへといのりこふ
（一六七頁　中巻・十　山城國令造經函人）

心ヲイタシテ願ヲオコシテアマタノ僧ヲ請シテ三七日ヲカキリテ此木トフラヒエサセ給ヘトイノリコフ（観）
至心發願請數僧三七日爲限令訪得給祈乞（前）

(30)わかいのちをたすけたまへ經ハかならすときかきたてまつらんとねむするに（一九七頁　中巻・十七　美作國採鐵山人）

我命ヲタスケ給ハ、カナラストクカキタテマツラムト念ス（観）
助我命給必將奉書祈念（前）

(31)我師のとしころよみたてまつりたまふ法花一そうわれをたすけたまへしにハちをミせたまふなとねむす
（一九三頁　中巻・十六　吉野山寺僧）

我師ノ年来ヨミタテマツリ給法花一（「經」をミセケチして「一」を補

入）乗我ヲタスケ給ヘ師ニ恥ミセ給ナト念ス（観）
我師年来奉讀法花經助我隠師僧恥給念（前）

例（29）は、「この木が得られるように」の意、例（30）は、「私の命を助けてください。」の意、例（31）は、「私を助けてください。」の意と解され、いずれも他者への「希求」を「表出」する用法である。なお、これらの例の文末はそれぞれ「いのり」「こふ」「念す」で結び、強い命令表現でなく希望表現であることを表現している。また、例（29）（31）の観智院本及び前田家本も同様な表現で対応関係になっているが、例（30）の観智院本における「給ハ」は仮定で意味的には「希求」の「説明」になる。

3、「いのる」「こふ」「もとむ」「たのむ」の用法

まず、「いのる」の用法を見る。関戸家本に「いのる」は九例見られる。

（32）物部の守屋の大連おほきなるいちひのきにのほりてちかひてものゝへのうちの大神をいのりてやをはなつ太子の御あふミにあたれり
（一〇九頁　中巻・一　聖徳太子）

物部守屋大連大ナル榎ニノホリテ物部氏ノ大神ヲチカヒテヤヲハナツニ太子ノ御アフミニアタレリ（観）
守屋大連登櫟木祈物部氏大神ゝゝ放矢中太子之鎧（前）

（33）檀越よろこひあやしひてます〳〵ふかくつゝしみいのる
（一六七頁　中巻・十　山城國令造經函人）

檀越悦ヒアヤシヒテマス〳〵フカクツ、シミイ乃ル（観）
檀越悦恠益ゝ心祈（前）

例（32）は、「大神に祈って」の意、例（33）は、「益々謹んで祈る。」の意と解され、いずれも実動詞用法である。また、例（32）の観智院本では「イノリ」ではなく、「チカヒ」となっている。

次に、「こふ」の用法を見る。関戸家本に「こふ」は一四例見られる。

（34）おのれはさとれるところなしたゝわつかに般若たらにをのミすしたもちてしきをこひていのちをやしなふ
（一七一頁　中巻・十一　高橋連東人）

オノレハマナヘル所スクナシタ、ワツカニ般若心經陁羅尼ヲ誦持シテ食ヲコヒテ命ヲヤシナフ（観）
己无所知只誦持般若陁羅尼乞食養命（前）

（35）ひとつをきたる乞者にあたふ
（二〇一頁　中巻・十八　大安寺榮好）

一ヲ来ル乞者ニアタフ（観）
一与来乞者（前）

例（34）は、「食べものを乞う」の意と解され、実動詞用法である。例（35）は、「一部分を乞者の人に与える。」の意と解され、「乞者」は熟語の名詞用法である。

次に、「もとむ」の用法を見る。関戸家本に「もとむ」は一七例見られる。

(36) はけむ心おこたりぬれはもとむる心かたきことも又かくのことし

（二三頁　上巻・四　精進波羅蜜）

勵心若怠求事成難又如此（観）

勵心若忿求事叵成亦如是（前）

(37) 白檀紫檀をもとむるにさからかの京よりとふらひえたりせに百貫してかひとりつ（一六七頁　中巻・十　山城國令造經函人）

白檀紫檀ヲモトム諾樂郷ヨリトフラヒエタリ錢百貫シテカヒトリツ（観）

求白檀紫檀自諾樂京訪得以錢百貫買取（前）

(38) 法ゑあすおこなはむとてかうしをもとめにやるつかひにいましめていはく（一七一頁　中巻・十一　高橋連東人）

法會ヲアスヲコナハムトテ講師モトメニヤル使ニイマシメテ云ク（観）

明日欲行法會遣求講師（前）

例(36)は、「道を求める心」の意、例(37)は、「白檀紫檀を求めるために」の意、例(38)は、「法会の講師を探しに」の意と解され、いずれも実動詞用法である。また、観智院本には「モトム」、前田家本には「求」で対応関係をなしている。

四、おわりに

以上、関戸家本における希望表現の構成形式及びそれぞれの用法を考察してきた。

その希望表現の構成形式については、「欲」「～むとおもふ」「～むとす」「願」「ねむ」「ねかはくは～」「ねかふ」「～たまへ」「いのる」「こふ」「もとむ」が見られ、これらの形式は、観智院本における「欲」「～ムトオモフ」「～ムトス」「願」「ネカハクハ～」「ネカフ」「タマヘ」「イノル」「コフ」「モトム」、前田家本における「欲」「願」「楽」「祈」「乞」「求」と基本的に対応している。しかし、平仮名表記の和文体でありながら「まほし」「ばや」など和文に多用される表現形式は用いられない。これは観智院本・前田家本と同様であり、為憲の初期型が平仮名文でなかったことの消極的な証拠となるかもしれない。

関戸家本には名詞「欲」の用例が少なく、仏教用語の「欲天」が平仮名表記である。また、仏教用語としての神仏に掛ける「願」が漢字で表記される。「～むとおもふ」「ねかはくは～」は「願望」と「希求」を「表出」または「説明」し、希望表現の中核をなしている。「ねかふ」「いのる」「こふ」「もとむ」は実動詞用法であり、連用形名詞法の用法は「ねむ（念）」しか見られない。

全体的には、その表現方法は観智院本・前田家本と概ね一致して、三伝本の希望表現に対応関係が見られる。ただし、例(1)における「よくてん」に対して、観智院本には「六欲天」、前田家本には「欲天」、例(15)における「願をおこして」に対して、観智院本には「願テ」、前田家本には「發願」、例(32)における「いのり」に対して、観智院本には「チカヒ」、前田家本には「祈」とあるように、関戸家本と前田家本と表現形式が同じであるが、観智院本とは異なる。一方、例(24)における「ねかはくは～たまへ」に対して、観智院本には「願ハ～給ヘ」、前田家本には「給」だけであるように、関戸家本と観智院本と表現形式が同じであるが、前田家本とは異なる。また、例(16)における「ねむ(念)をおこす」に対して、観智院本には「発願ス」、前田家本には「発願」、例(25)における「なかはくは～命令形」に対して、観智院本及び前田家本には「ねかはくは」に

相当する用語が見られないように、関戸家本は観智院本とも前田家本とも表現形式が異なる。

以上の考察から見られるように、三伝本は同一説話集を三種の文体で表現したものであるが、希望表現の考察から見て、三伝本の相互関係について、観智院本の独自性および成立過程に若干の情報を付け加えたことになるだろう。

［追記］ 原稿提出後、安田尚道氏のご論文（7）により、テキスト未掲載断簡を閲覧しえた。新たに、「願」の名詞用法二例、「いのる」の動詞用法一例、および左記の二例を追加することができた。

○「～むとおもふ」の例

（補1）ほさちのくらゐにいらんとおもふ

（下巻・3比叡山殲法　円照寺（奈良市山町）蔵の原本）

ササ（菩薩）位ニ入ムト思ヒ（観）

入ササ（菩薩）位思（前）

○「ねがはくは」の例

（補2）つてにきくこの山にこかねありとねかはくはわかちたまへといのるに

（下巻・22　東大寺千花會　東大寺龍松院（奈良市）蔵の原本）

ツテニキク此山ニ金山アリト願ハクハ分給ヘト（観）

傳聞此山有金願分給（前）

（補1）は「菩薩の位に入りたい。」の意、（補2）は「金をお分けください。」の意であり、ともに「願望」を「表出」する用例であり、これまでの表現と一致するものである。

【注】

（1）柴田昭二、連　仲友「希望表現の通史的研究　序説」『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部第109号』平成12年3月。

（2）ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「～たい」の形で、「希求」は「～てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称～たい」「一人称～てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称～たかった」「一人称～てほしかった」、二人称形式「二人称～たいか」「二人称～てほしいか」、三人称の「三人称～たがる」「三人称～てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

（3）注（2）参照。

（4）注（2）参照。

（5）注（2）参照

（6）注（2）参照。

（7）安田尚道「『三宝絵詞』東大寺切とその本文（一）」『青山語文』第十一号（昭和56年3月）

安田尚道「　同　（二）」第十二号（昭和57年3月）

（しばたしょうじ　香川大学名誉教授）

（れんちゅうゆう　広島市立大学客員研究員）

（二〇一九年一一月二九日受理）